

(PDF版・1の3) 『教会教義学 神論Ⅰ／1 神の認識』 「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」 「一 神の前での人間」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」 「一 神の前での人間」 (1-54頁)

「一 神の前での人間」

「第一の問い」としての「どの程度まで神は認識されるのか」、また「第二の問い」としての「どの程度まで神は認識可能であるのか」という二つの問いの内の「**第一の問い**〔すなわち、「<どの程度まで>神は認識<される>のか」という問い〕」における「**神の言葉によって実現される神認識**〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事〕」においては、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として**客観的に可視的に存在している**第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）の現存からして、「<初め>のところで、〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」（「啓示のくしるし>）」としての第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているところの、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の〕**神の言葉による拘束が生起しなければならない**」、換言すれば第三の形態の神の言葉であるイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ」「教会に宣教を義務づけている」ところの、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」としての第二の形態の神の言葉である「聖書は、先ず第一義的に優位に立つ原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕としてのイエス・キリストと共に、〔第三の形態の神の言葉における全く人間的な〕教会の宣教における原理である」という**拘束が**、それ故に「聖書が教会を支配するのであって、教会が聖書を支配してはならないのである」という**拘束が生起しなければならない**。したがって、そここのところでは、「一つの立場を造り出そうとするいかなる意図も……働いてはならず」、「すべての自分の意図や選択なしに、自分自身既に一つの立場の中におり〔すなわち、その「啓示自身」が「啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>を持っている、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉自身がその言葉自身の出来事の自己運動を持っているイエス・キリストにおける神の自己啓示、キリストにあつての啓示、啓示の真理、恵ミノ類比（啓示の類比・信仰の類比・関係の類比）の中におり、それ故に「教義学的な合理主義を明確に否定した」啓示神学の中におり〕、「第一の形態の神の言葉である

イエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書の中で証されているところの、起源的な第一の形態の] 神の言葉によって指し示された可能性以外にはほかの可能性は問題とならないところの、……神の言葉による拘束が生起しなければならない」。そのところでは、「その〈初まり〉の点で、〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身」が、「啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を、「啓示ない和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動を持っているのであるから、その第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているところの、起源的な第一の形態の] 神の言葉からして、そのような拘束は、われわれの身に迫って来るのであり、それがそのところで承認され、われわれがそれをそのところでわれわれの身に起こらしめるということ、そのためにこそ、〔聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、〕 信仰のよき戦いが戦わなければならない」。

「第一の問い〔すなわち、「<どの程度まで>神は認識<される>のか」という問い〕」における「神の言葉によって実現される神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事〕が、すべてのそのほかの対象と異なるその特定の一つの対象に拘束されているということ」、その神認識が「ほかならぬその対象を知る認識〔信仰の認識としてのキリストにあっての<神>認識、キリストにあっての<啓示>認識・<啓示>信仰、人間的主体に実現されたキリストにあっての<神の恵み>の出来事〕であって、決してそのほかの対象を知る認識ではないということ」、「換言すれば、あくまでその言葉の中でご自身を認識させるべく与え給う神の認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事〕であるということ」（その言葉自身の出来事の自己運動を持っている「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉の中で、ご自身を認識させるべく与え給う<神>の認識、すなわち信仰の認識としてのキリストにあっての<神>認識、キリストにあっての<啓示>認識・<啓示>信仰、人間的主体に実現されたキリストにあっての<神の恵み>の出来事であるということ）——「そのことは、……さらにまた……その確実さを損なうことなしに、……まさにその確実性の中でこそ、<間接的な>認識〔信仰の認識としてのキリストにあっての<神>認識、キリストにあっての<啓示>認識・<啓示>信仰、人間的主体に実現されたキリストにあっての<神の恵み>の出来事〕であるということの意味している」。「まさに（イエス・キリストにおける神の自己啓示の中でこそ〔まさに「自己自身である神」としての聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「失われぬ単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「三位相互内在性」における三位一体の神の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われぬ差異性」における第二の存在の仕方、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事、「啓示ないし和解の实在」その

ものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおける神の自己啓示、キリストにあっての啓示の中でこそ)、まさにイエス・キリストの中でこそ、隠れた神は、ご自身を把握できるものとし給うた」。しかし、そのことは、「決して直接的にではなく、＜間接的に＞である」、詳しく言えばイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞、神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的な「存在的なく必然性＞」——すなわち、客観的なその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」と主観的な「認識的なく必然性＞」——すなわち、その「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による信仰の出来事（「啓示と信仰の出来事」）を前提条件としたところの、客観的な「存在的なくラチオ性＞」——すなわち、客観的な啓示＜認識＞・啓示＜信仰＞の**根拠**としての三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）と主観的な「認識的なくラチオ性＞」——主観的な啓示＜認識＞・啓示＜信仰＞の**根拠**としての徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性に基づいて終末論的限界の下で与えられる「信仰に対してである」、「その本質の中においてではなく、＜しるし＞の中においてである。このように、とにかくご自分を把握できるものとし給うた」。その内在本質が肉となったのではなく、その「外に向かつて」の外在的な第二の存在の仕方における「＜言葉が肉となった＞」——「これが、すべてのしるしの＜最初の、起源的な、支配的なしるし＞である」、換言すれば人間的理性や人間的欲求やによって対象化され客体化されたに過ぎない人間的な自然（観念的生産物）としての「存在者」、その人間の意味世界、物語世界、神話世界では決してないところの、**徹頭徹尾神の側の真実**としてある、イエス・キリストにおける神の自己啓示としての、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方における**言葉の受肉としての＜「存在者」＞**である。したがって、それは、人間的理性や人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的な自然（観念的生産物）としての「存在者」、「存在者レベルでの神」ではない、それ故にその対象からして信仰は、「存在者レベルでの神への信仰」ではない。その「＜最初の、起源的な、支配的なしるし＞（言葉の受肉としての＜「存在者」＞）」に基づいて、その＜しるしのしるし＞として、「そのほかにも神の永遠の言葉の被造物的なしるしが存在する」。すなわち、先ず以て「啓示ないし和解の實在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念

の实在」としての「啓示との〈間接的同一性〉〔区別を包括した同一性〕」において現存している第二の形態の神の言葉である聖書（すなわち、預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」）が「〈しるしのしるし〉」（啓示の〈しるし〉）として客観的に可視的に存在している、また「教会に宣教を義務づけている」聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である教会の〈客観的〉な信仰告白および教義（Credo）が「〈しるしのしるしのしるし〉」（啓示の〈しるし〉の〈しるし〉）として客観的・可視的に存在している。「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間「イエス・キリストと地上における〔客観的な〕可視的なみ国」（客観的な「存在的なく必然性」と「認識的なく必然性」を前提条件とした主観的な「認識的なくラチオ性」）を包括した客観的な「存在的なくラチオ性」の現存）——「これこそ、神ご自身によって造り出された……神を直観と概念を用いて把握し、したがってまた神について語るができる」「偉大な可能性」である。このことは、キリストにあっての「神は、そのような認識の〈対象〉であり、〈対象〉であり続け給うということの意味している」。

イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、キリストにあっての「神が、ご自身を、人間に対して、み言葉の啓示の中で〔すなわち、起源的な第一の形態の神の言葉としての客観的な「啓示ないし和解の实在」そのものの中で、客観的な「啓示の出来事」の中で〕、聖霊を通して〔その「啓示の出来事」の中での主観的側面としての、「慰め主としての霊」、「真理の御霊」、「聖書の中のキリスト教原理を、覆いをとって明らかにする」、「キリストについて語るができる能力」である「聖霊の注ぎ」を通して、主観的な「信仰の出来事」を通して〕与え給うのであれば、そのことは、〔キリストにあっての〕神が、〔神のその都度の自由な恵みの神的決断により、神の側から、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、あくまでも「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固執するという〈方式〉の下で、「われわれ人間からは何ら応答を期待せず・また実際に応答を見出さずとも、神であることを廃めずに、何ら価値や力や資格もない罪によって暗くなり・破れた姿のわれわれ人間的存在を己の神的存在につけ加え、身内に取り入れ、それをご自分と分離出来ぬように、しかも混淆されぬように、〕主体としての人間に対して、客体の関係に入り給うということの意味している」。したがって、キリストにあっての「神は、その啓示の中で、人間によって直観と概念をもって把握され給う」。したがってまた、現存するわれわれ人間は、人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、「〈人間は〉、〈彼が神の前に立つことによって〉〔すなわち、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉における客観的な「存在

的なくラチオ性>」、換言すれば客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返し、聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方で、神の前に立つことによって]、<神を認識する>〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事に与る〕。キリストにあつての「神が、〔自己自身である神として、〕起源的に本来的にご自身にとって対象であり給うということ〔すなわち、自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由な「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の根源・起源としての「父は、子として自分を自分から区別するし自己啓示する神として自分自身が根源〔・起源〕である」ということ、それ故に「その区別された子は、父が根源〔・起源〕であり」、「神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊は、父と子が根源〔・起源〕である」ということ〕——このことは、「言うまでもなく、〔その三位一体の〕神はまた、〔われわれのための神として、〕人間にとっても全く別な仕方で〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、徹頭徹尾「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという<方式>の下で、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>における客観的な「存在的なくラチオ性>」に基づいて〕対象であり給うということについて、何ら事情を変えるものではない」。このような訳で、「われわれの神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕の現実性」は、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>と「共に立ちも倒れもするのである」。したがって、われわれは、生来的な自然的な人間的理性や人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的な自然（観念的生産物）としての「存在者レベルでの神」認識、それ故に「対象的でない、認識するものと認識されるものとの間の区別を取り除いてしまう認識であるであろう把握の仕方すべてに対して限界をひくのである」。言い換えれば、例えば、われわれは、「（中略）神の啓示の内容は、〔キリストにあつての〕神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神から発生した……。 （中略） こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない！』 ……」、その時「（中略）神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」、「もし君が無限者を思惟するならば、そのとき君は思惟能力の無限性を思惟し且つ確証しているのである。そして、もし君が無限者を情感するならば、そのとき君は感情能力の無限性を情感し且つ確証しているのである。〔何故ならば、その時、〕理性の対象とは自己自身にとって対象的な理性であり、感情の対象とは自己自

身にとって対象的な感情である〔からである〕」（フォイエルバッハ『キリスト教の本質』）、「神とはまさに、人間の想像能力・思惟能力・表象能力の本質が、現実化され対象化された……絶対的な本質（存在者）、……と考えられ表象されたもの以外の何物でもない」（『フォイエルバッハ全集第12巻』「宗教の本質にかんする講演下」）という認識であるであろう把握の仕方すべてに対して限界をひくのである、すなわち「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉における客観的な「存在的な〈ラチオ性〉」としてのそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に可視的に存在している「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続しないところの、〈非対象的な把握の仕方〉すべてを首肯することはできないのである。

「われわれは、そのことを、アウグスティヌスの『告白』に出て来る最も美しい、しかし同時に最もどうかと思われる……アウグスティヌスと彼の母モニカの対話」、すなわち「目ガマダ見ズ、耳ガマダ聞カズ、人ノ心ニ思イ浮カビモシナカッタコロノ（聖徒タチガウケル）永遠ノ生命（Iコリント二・九）に関するもの」、すなわち「彼と彼の母が、いかに感覚によって得られる最高の喜びについての考察を超えて、さらに〔段階的に〕〈ソレ自身ナルモノ〉ノ中ヘト（詩篇四・九、ワタシハソレ自身ナルモノノ中デ安ラカニ眠リ、マタ伏シマス……）高まって行ったかについて報告している」こと「に照らして明らかにする」。「彼らは、段階的に、目に見える天とその星辰の総体を含む物的な世界全体を通り抜けて、神の業について語り合い、嘆賞しつつ、さらに高く昇って人間の精神に出会い、またそれをも超えて、アノ汲ミヅクシ得ナイ豊カナ地〔知恵、真理の地〕ニ達シヨウトシタ」、「ソノ地ニオイテ、アナタハイスラエルヲ、真理ノ秣モテ永遠ニ養イ給ウ。ソコニオイテハ、生命ハ知恵デアリ、カツテアッタモノモ未来ニアルデアロウモノモモスベテコノ知恵ニヨツテ成リマスガ、知恵ソノモノハ成ルコトナク、カツテアッタヨウニイマモアリ、イツマデモアルコトデショウ。トイウヨリムシロ、知恵ノウチニハ、『アッタ』も『アルデアロウ』モナク、タダ『アル』ガアルダケナノデス。ナゼナラ、ソレハ〔知恵、真理は〕永遠デスカラ。コレニ反シ、『アッタ』ヤ『アルデアロウ』ハ永遠デハアリマセン。サテ、〈私たちハ、知恵ニツイテ語り、アエギモトメナガラ、全力ノカヲコノ一挙ニコメテ、〔非対象的に〕ホンノ一瞬ソレニフレマシタ。ソシテ深イタメイキヲツキ、ソコニ霊ノ初穂ヲ結ワエノコシテ、コトバニ始メト終リトガアルワレワレ人間ノ騒々シイ口舌ノ世界ニモドリマシタ〉」。「それに基づいて、彼ら」は、「人間のうちで〔自然の一部としての〕肉ノサケビが……〔外界としての自然としての〕地や水や空気のすべての表象が沈黙し、また〔自然から超出した自由な〕魂自身も沈黙する時、〔肉体・身体と意識・精神の全体性としての〕ワレヲ忘レテ自分ヲ〔超越し〕超エテ行ク時、夢ヤ想像力的ナ幻ガ……スベテノ言葉トシルシ、生滅スルスベテノモノガ完全ニ沈黙スル時、……実際、コレラノモノニ尋ネルナラバ、彼ラハロヲソロ

エテ、〔非対象的な把握の仕方で、〕『ワレワレヲ造ッタノハ、私タチ自身デハナイ。ワレワレヲ造ッタノハ、永遠ニトドマリ給ウオ方デアル』ト言ウデアロウカラ……、こういったすべてのものが神の方に耳を傾け、黙りこくってしまう時、＜ソシテ神ゴ自身ガタダヒトリ、ソレヲ通シテデハナク、ゴ自身デ語り、コノ言葉ヲ私タチガ、肉ノ舌ヲ通シテデモ、天使ノ声ヲ通シテデモ、雲ノヒビキヲ通シテデモ、謎メイタタトエヲ通シテデモナク、コレラニオイテ愛シタテマツル神ゴ自身ヲ＞コレラニヨラズニ聞ク時、スナワチ、タッタ今、私タチガ思イヲ伸バシ、万物ヲ超エテトドマリ給ウ永遠ノ知恵ニアワタダシイ思惟ニヨッテフレタヨウニ、＜ソノ者ゴ自身ヲ＞聞ク時、この状態が継続して、他のもろもろの表象が取り除かれ、＜タダコノーツノ直観ニ見ル者ノ心ガウバワレ、スイコマレ、深イ内的歎喜ニヒキイレラレル時、ソシテ、今アエギ求メ、コノ一瞬〔非対象的な把握の仕方で〕悟リエタモノガ、永遠ニ続ク生命トナル時＞、ソレコソハマサニ『汝ノ主ノ喜ビノウチニ入レ』（マタイ二五・二一）ト言ワレル時デハナイカ。ソレハイツノコトデアロウ。『私タチハ皆ヨミガエルガ、カナラズシモスベテノ者ガ化スルワケデハナイ』（Iコリント一五・五一）ト言ワレタアノ時デアロウカ。「この箇所を始めと終わりは、アウグスティヌスが、「あの日の体験」を介在させて）未来の最後の時における神の永遠的な観照について語ろうとしているということを示している。「時間の中で、無時間的な真理が彼に出会った」のである。そこでは、「彼は、神を、思想なしに、たとえなしに、言葉なしに、しるしなしに」、「神ゴ自身を、ほかのものを通してではなく〔すなわち、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞における第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）を通してではなく、それ故に非対象的な把握の仕方で〕、「ゴ自身を通して語り給う神を、コレラノモノナシニソノ方自身ヲ、見・聞いたのである」。「この体験の現実性および内容が何であれ」、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞におけるそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に可視的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における「み言葉の中での神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事〕の实在」は、アウグスティヌス的な「そのような無時間的な、対象的でない見ることと聞くことの表象を通しては〔そのような非対象的な把握の仕方では〕、まさに到達され＜ない＞ということである」——このことは、「確かである」。言い換えれば、アウグスティヌス的な非対象的な把握の仕方における神認識は、人間的理性や人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的な自然（観念的生産物）としての「存在者」、「存在者レベルでの神」、その人間の意味世界・物語世界・神話世界であると言いうことができるから、客観的な正当性と妥当性をもって根本的包括的に原理的になされたフォイエルバッハのキリスト教批判の対象そ

のものである。

因みにミシェル・フーコーは、人類史のアジア的段階の内部における観点とその外部としての西欧近代の段階における観点との全体性において、＜キリスト教の神秘主義＞と＜禅＞の差異性について、次のように述べている——人類史のアジア的段階における自然を内面の原理とした「禅はキリスト教の神秘主義とは全く違うものだ。（中略）キリスト教の精神性と、それに結びついた技術においてきわめて印象深いのは（中略）いや増す個別化が探究されているということです。個々人の魂の奥底にあるものを、その個人に把握させようとするのです。『おまえが何者であるのか、私に語れ』——これこそがキリスト教の精神性なのです。〔只管打座による身心脱落や自己放下における自然との合一を目指す自然を内面の原理とする〕禅においては、精神性にまつわる一切の技術は、逆に個人を非個別化する——個性を破る傾向があるように思えます」と（『思考集成 VII』「フーコーと禅」）。何故ならば、現在は衰退しているとは言え、人類史におけるアジア的段階の名残としての日本的な特徴の一つは、共同体至上意識がいつも個性を超えていくところに想定できる。文明史的観点からする人類史のアジア的段階の特徴は、確かに次のような点にあると言える——「精神と自然との直接的な統一の段階、即ちそういう（中略）段階は、一般に〔人類史のアジア的段階における〕東洋思想である」、「精神は東洋から昇り始めると言ってよい。しかし、主観は人格としてではなく、客観的な実体的なもの〔自然〕の中に没入しているのである。（中略）没精神的な状態（中略）最高の境地は意識のないことだからである。（中略）その意味で人間は、そこでは自然によって規定されている。（中略）このように東洋的主観は何ものにも依存しないという長所をもつ。なぜとって、一切皆空だからである」、「人間は本来、理性的であると言えば、人間は素質の形で、萌芽の形で理性を持つことを意味する。この意味において人間は理性、悟性、想像、意志を生れながら〔生来的に自然的に〕にもつ。（中略）しかし子供〔例えば、自然を原理とする人類史のアジア的段階の人間〕は、このような理性の能力〔人間の自由な内面の無限性の能力、人間の自由な自己意識・理性・思惟の類的機能の能力、人間の自由な自己意識・理性・思惟が自由を認識し自覚して、自由を原理とする能力〕、あるいはその可能性を単にもつというだけであるから、理性をもたないのと同じである。そしてそれ故に、自由でもないのである」、「すべての人間が本来、理性的であり、そうしてこの理性的ということの形式こそまさに自由だということである……（中略）一方〔経済的基盤を狩猟採取に置き、「内在の精神史の観点」を持たない「文明史的観点」だけから未開で野蛮なだとして除外されてしまった人類史のアフリカ的段階における〕アフリカ民族〔日本で言えば＜原＞日本的・縄文的段階の＜原＞日本人・アイヌ人、北米で言えば原住民のインディアン的段階のインディアン、オーストラリアで言えば原住民のアボリジニ的段階のアボイジニ等々〕および〔経済社会構成を農耕に置き、土地の総括的な共同体的所有と貢納制において自然を原理とした文明史的観点から「精神は東洋から昇り始める」、「しかし、主観は人格としてではなく、客

観的な実体的なもの〔自然〕の中に没入し、「没精神的な状態〔没我の境地〕」、「最高の境地は意識のないこと」とされた人類史のアジア的段階における〕アジアの民と、他方〔都市工業および商業を蔑視し農業を尊重し、市民的土地所有において自由を認識し自覚した人類史の古典・古代の段階の〕ギリシャ人、ローマ人および〔経済社会構成を資本主義に置き、土地の私的所有において<「私利」、「私意」>の精神としての自由を認識し自覚した、文明史的観点から人類史の頂点とされた西欧近代の段階における〕現代人との唯一の区別もまた、(中略) 後者が自由であることを自分で知っており、それを自覚しているのに、前者は彼らもまた自由であるにかかわらず、それを知らず〔認識し自覚せず〕、自由なものとして実存しないことなのである(ヘーゲル『哲学史序論—哲学と哲学史』)、「人間もおのれを空しくすればブラフマンの境地に達することができ、そこでは有限な人間とブラフマン(宇宙の原理)の区別がなく、梵我一如となってあらゆる個別が消滅する。(中略)意識が対象なき意識になっている」(ヘーゲル『法哲学講義』)。

さらに、「人は、……、アウグスティヌス自身は、別な脈絡の中では……神の永遠的な観照のことを、それと全く違った仕方で記述したということを引き合いに出してよい……」——「ワレワレハ、イタルトコロ存在シ、スベテノモノヲ治メ給ウ神ヲ最モ明瞭ニ見テトルデアロウ。……ワレワレハマタ、形体的ナ実体ヲ手ガカリニシテ形体ノナイ神ヲ眺メルデアロウ。……ワレワレハ、神ヲ靈ニヨツテワレワレ自身ノ中デ、オ互イノ中デ、彼ゴ自身ノ中デ、新シイ天ト新シイ地ノ中デ、ソノ時存在スルスベテノ造ラレタ物ノ中デ、見ルデアロウ。マタカラダニヨツテワレワレハ、神ヲスベテノカラダノ中デ、見ルデアロウ」。この『告白』における非对象的把握の仕方としての「超越スルこと」は、キリストにあつての「神がその啓示の中で〔その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>におけるそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に可視的に存在している「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)の中で、すなわち对象的な把握の仕方の中で〕、人間と出会い給い、神が人間に対しご自身を聞き・見るために与え給う場所を見捨てること、あるいは少なくとも見捨てようと欲することを意味している……。言い換えれば、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>におけるそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に可視的に存在している「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)に連帯し連続した「对象的な神認識〔对象的な把握の仕方における信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的な主観に実現された神の恵みの出来事〕」を介在させないところの、アウグスティヌスの「非对象的な」「あの体験の形で神認識においては、子供らしい感覚的な表象を用いての对象的な知覚、神を直観と概念を用いて把握することで始まった道の上でのもっと高いあるいは最高の段階の上にいるのではない」。したがって、アウグスティヌスの「非对象的な」「あの体験の形

での神認識のような「主張」は、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているところの、起源的な第一の形態の「神の言葉の中での実際の神認識の実現がまだ始まっていなかったか、あるいは既に再び止んでしまったところで掲げられる」主張である。言い換えれば、「神認識が実行されつつあるところ、そこでは、あの神の啓示の傍らを素通りして行くことは起こり得ないし、非対象性へと逃れるあの逃避は起こり得ない」。すなわち、「神認識が実行されつつあるところ」——「そこでは、神認識は、ちょうどその認識が特定の対象、その言葉の中でご自身を認識すべく与え給う神に拘束されているように、またその対象性〔あの〈総体的構造〉における客観的な「存在的なラチオ性」としてのそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）〕に拘束されている」。

しかし、アウグスティヌスは、「このわがまま勝手さ」の思惟と語りに反して、一方で「よい言葉を語っている」——「自分ノ聞キタイコトヲアナタタカラ聞コウトスルヨリモ、ムシロアナタカラ聞クコトヲソノママ受ケトリタイト心ガケル人コソガ、最良ノアナタノ僕ナノ德斯」、ちょうど、『告白』では「過去、現在、未来は精神の中にあって、ほかのどこにあるのでもない」と述べているにも拘らず、『神の国』で「神は時間ノ創造者マタ決定者と呼んでいる」ように。

バルトは、「存在するものそのもの、その純然たる造られた存在に依拠したアウグスティヌスの造ラレタモノヲトオシテ、知解サレタ創造主ヲ認識シテ、私タチハ三位一体ナル神ヲ知解スルヨウニシナケレバナラナイ、ソノ跡ハフサワシイカタチデ被造物ノウチニ顕レテイルノデアル」という包括的に言えば自然神学の段階で停滞した思惟と語りにおける「三位一体の跡は、世界に対して超越する創造神の跡として理解することはできない。それは、ただ単なる人間自身の内在的に理解された宇宙の諸規定、人間的な現実存在の諸規定、単なる宇宙論や人間論、人間の世界理解の、最終的には人間の自己理解、神話に過ぎない」と述べている。そして、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力に信頼した」バルトは、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書に依拠した（聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした）教会の宣教およびその一つの補助機能としての「神学を、ただ啓示の中にのみ基礎づけるために」、「罪深い曲がった人間の究極的な限界性を自覚した人間の言語を前提として、三位一体を、世界から説明しようとする欲しないで、むしろ逆に、世界を〔「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」（「啓示の〈しるし〉」）としての「啓示との〈間接的同一性〉〔区別を包括した同一性〕」において現存している第二

の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているところの] 三位一体から説明せんと欲する」と述べている。